The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エスキシェヒル・カラチャイ語におけるアスペクトを表す複雑述語を形成する形式“tebre-”
Author(s)	藤家, 洋昭; Akbay, Okan Haluk
Citation	外国語教育のフロンティア. 2022, 5, p. 105-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87570
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エスキシェヒル・カラチャイ語におけるアスペクトを表す複雑述語を形成する形式“tebre-”

The "tebre-" Form Which Forms Complex Predicates in Eskisehir-Karachay

藤家 洋昭・AKBAY, Okan Haluk

要約

エスキシェヒル・カラチャイ語におけるアスペクトを表す形式“tebre”-を記述した。エスキシェヒル・カラチャイ語は、トルコ共和国で話されている、いわゆる消滅の危機に瀕した言語のひとつである。系統的には、トルコ語と同じくチュルク系の言語である。エスキシェヒル・カラチャイ語についてのこれまでの記述はほとんどなく、本研究でとりあげた“tebre-”についての記述も全くといっていいほどない。そこで、本研究では“tebre-”の性質を明らかにし記述することを試みた。本研究ではフィールド言語学的方法により、まず母語話者から“tebre-”に関するデータを収集した。収集したデータは、伝統的な方法にとらわれずに、語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)の枠組みに沿って記述した。本研究の結果、エスキシェヒル・カラチャイ語における“tebre-”が一見「～しはじめる」「もうすぐ～する」という多義性を持つように見えるが、語彙概念構造レベルでは「開始」という一つの意味を持つことが明らかになった。

キーワード：チュルク諸語、エスキシェヒル・カラチャイ語、複雑述語

QISĞA SÖZ

Bu cazuwda Eskişahar Qaraçayçasında aspektni kögüzgen ”tebre”ni qolga aldıq. Eskişahar Qaraçayçası, Türkiyede söleşilgen bir til bolup söleşgenleni sanı barbara tarqayadı. Qaraçayça, Türkçe kibik bir Türk tildi. Endige deri Eskişahar Qaraçayçası üsünden etilgen hazna zat coqdu. Bizni bu col qolga alğanıbız ”tebre” üsünden de etilgen cuq coqdu. Anı amaltın ”tebre”ni qallay zat bolğanın kögüzürge izledik. Bu cazuwnu cazar üçün alan tilbilim coluna köre alğın Qaraçayça söleşgenleden ”tebre” üsünden datala cıydıq. Cıyğanıbız datalanı Söz Tüşünüw Capını (Lexical Conceptual Structure) belgilerine köre caraşdırdıq. Urunuwubuznu ahırında Eskişahar Qaraçayçasında ”tebre” degen söz bir cuq eterge tebregen degençe anılamı bolğanlığına Söz Tüşünüw Capıda başlağan degen anılamı bolğanı da belgili boldu.

1. はじめに

エスキシェヒル・カラチャイ語は、トルコ共和国エスキシェヒル県で話されているチュルク系の言語である。話し手の数の正確な調査はないが、数千人と考えられ、いわゆる消滅の危機に瀕した言語の一つである。記述はほとんどされていない。「山」を表す形式が“taw”であること、またその他多くの言語特徴から、チュルク語のなかでは同じくチュルク系の言語であるトルコ語が属するオグズグループではなく、キプチャクグループに属すると考えられる。ただしトルコ語と接触しているため、トルコ語の影響を受けていることは容易に推察できる。また、ロシア共和国コーカサス地方にもカラチャイ語と呼ばれる言語が話されている。エスキシェヒル・カラチャイ語とコーカサスのカラチャイ語がどういう関係にあるかについては、エスキシェヒル・カラチャイ語の記述が進んでいないため明らかではない。

このような状況のなかで、エスキシェヒル・カラチャイ語の全体像を明らかにするための記述の手始めとして、本研究ではアスペクトを表すと考えられる複雑述語、具体的には「動詞 + tebre-」をとりあげて記述・分析する。調べた限りにおいては、エスキシェヒル・カラチャイ語の「動詞 + tebre-」についての先行研究は全くといっていいほどない。

本研究では、母語話者から得た一次データを考察・分析の対象とし、それらのデータを言語理論にもとづいて分析する。本研究は、「エスキシェヒル」・カラチャイ語の記述が目的であるため、コーカサス等のカラチャイ語のバイアスがかからないよう心がけて記述する。

本研究の結果、tebre- は一見多義性を持つように見えるが、tebre- の意味はあくまで「開始」であり、前項の動詞が持つ LCS のどの部分を指すかによって複雑述語全体の意味の違いが現れるということを主張する。

エスキシェヒル・カラチャイ語はいわゆる無文字言語であるが、本論文ではチュルク諸語共通アルファベット (Ortak Türk Alfabesi) を用いてエスキシェヒル・カラチャイ語を表記する。

本論文は、Akbay と藤家による共著論文である。この論文における分担は次のとおりである。Akbay は主にデータの発掘と提供を、藤家は主に全体の構成と提供されたデータの分析を担当した。

2. データと考察

エスキシェヒル・カラチャイ語の tebre- を伴う複雑述語のデータを考察する。本研究で扱ったエスキシェヒル・カラチャイ語のデータは、すべて母語話者から収集した一次データである。

2.1 データ

エスキシェヒル・カラチャイ語は、いわゆる主辞後置型の言語であり、述語動詞は文末に位置する。本研究で扱う複雑述語の場合、「動詞 + tebre-」という形をとり、tebre- が複雑述語ではない、つまり動詞ひとつからなる単純述語における動詞と同様の活用をする。tebre- はまた独立した動詞としても用いられる。独立した動詞として用いられたときの基本的意味は、「向かう、行こうとする、進もうとする、出発する」等であり、つぎのような例をあげることができる。

(1) Qaçan tebrerikbiz?
いつ・tebre(未来・一人称複数)
「私たちは、いつ行くんですか。」

(2) Tebrer sağatıngda manga da ayt.
tebre(分詞)・時間(君の・で)・私に・も・言う(命令)
「君が行くとき、私にも連絡しなさい。」

(3) Qayrı tebregense?
どこへ・tebre(完了(過去)・二人称単数)
「君はどこへ行こうとしているんですか。」

tebre- の前に来る動詞(以下、前項と呼ぶことにする)は、チュルク語伝統文法で言うところの副動詞形のいくつか、具体的には“-ip”あるいは“-e”の形をとる。-ip, -e の、複雑述語ではない用例を示す。

-e の例

(4) Aliy kün sayın araqı içe cöngerleri bile tüyüşe bek aman caş bolğandı.
アリ(人名)・日・ごと・酒・飲む-e・仲間・と・喧嘩する-e・非常に・悪い・若者・なる(完了(過去)三人称)
「アリは、毎日お酒を飲んだり、仲間とけんかしたりして、本当に悪い若者になってしまった。」

-ip の例

(5) Şamay Almanya’ğa barıp Almança oqudu.
シャマイ(人名)・ドイツへ・行って・ドイツ語・勉強した
「シャマイは、ドイツへ行ってドイツ語を勉強した。」

これらからわかるように、動詞 -ip は日本語の「食べて」などのような、「(動詞)て」に似ていることが観察できる。ただし、tebre- の前に来る動詞、すなわち前項の動詞が -e の形である場合と -ip の形である場合における意味の違いはこれまでのところ観察されてい

ない。意味の違いの有無については今後も研究を進める必要があるが、本研究では動詞 -ip tebre- と動詞 -e tebre- を区別せずに扱う。

2.1.1 複雑述語としての「動詞＋tebre-」

動詞 + tebre- は、かなり生産的であるとみられ、つぎのような組み合わせ例をあげることができる。

oqup tebre-, cetip tebre-, aşap tebre-, içip tebre-, söleşip tebre- ...

これら、「動詞 + tebre-」が理論的にどの部門で生成されるのか、具体的にはどういう形でレキシコンに登録されているかということは非常に興味深い問題であり、おそらくこれらは別々にレキシコンに登録され、全体としては複合動詞ではなく動詞句を形成しているという予測的結論であるが、これ以上の議論は機会を別にしたい。

以下、これらの中からいくつかをとりあげ、文の形になっているものを考察する。

2.1.1.1 用例

この節では「動詞 + tebre-」の用例を見る。

(6) Şamay kitap oqup tebredi.

シャマイ・本・読む -p・tebredi

「シャマイは本を読みはじめた。」(シャマイは本を読んでいる。)

(7) Otobüs Eskişahar'ğa cetip tebredi.

バス・エスキシェヒル(地名)へ・到着して・tebredi

「バスはまもなくエスキシェヒルに到着する。」(バスはまだ着いていない。)

ここで問題になるのは、(6) では動作が実現しているという意味があるのに対し、(7) には動作がまだ実現していないという意味があることである。

同じように、

(8)Toplantı boşay tebredi.

会議・終わる -e・tebredi

「会議が終わるところです。(まだ終わっていない)」

ただし、「私の馬が死にそうだ。」という意味で、

(9)*Atım öle tebredi.

馬(私の)・死ぬ -e・tebredi

ということはできない。(9) は非文である。なぜ非文なのか、今後の課題である。

2.2 まとめ

以上の考察をまとめると、エスキシェヒル・カラチャイ語の tebre- からなる複雑述語に

は、「～しはじめる」と「もう少しで～する」という二つの意味がある、すなわちtebre-は多義性を持つ、ということができる。

ここまでが、表面的な考察によるものであるが、それはあくまで表面的なもので、tebre-が(少なくともこの節での考察に関する)多義性を持つことについて以下で否定する。

3.分析

この章では、前章で見た多義性を分析する。

本研究では、語彙主義の立場に立ち、Jackendoff [1]によって提案された語彙概念構造（Lexical Conceptual Structure: 以下LCSと呼ぶ）によって分析する。

3.1 語彙概念構造(LCS)

LCSには、研究者よる、あるいは、同じ研究者によるものでもバージョンによる違いがあるが、本研究では先行研究[2]にもとづき、次の基本述語を分析の前提にしている。

CAUSE：外的な誘因が対象物の変化を引き起こすことを表す。

ACT：継続的あるいは一時的な「活動」を表す。主語の意思によって活動のはじめと終わりを決めることができる。

ON：ACTと一緒に用いられると働きかけの対象を示す。

BECOME：「変化」を表す。

BE：静止した「状態」を表す。

AT：BEと一緒に用いられて、抽象的状態、物理的位置を示す。

これら基本的述語の組み合わせにより、具体的な語におけるLCSにもとづく語彙情報は次のようになる。

活動自動詞：[1ACT]

働きかけ他動詞：[1ACT ON-2]

変化自動詞：[BECOME [2BE AT-3]

使役他動詞：[[1ACT (ON-2)] CAUSE [BECOME [2BE AT-3]]]

3.2 分析

2章では、エスキシェヒル･カラチャイ語の「動詞＋tebre-」には大きく「～しはじめる」と「もうすこしで～する」の二つの意味があることを指摘した。ここでは、前節で示した語彙概念構造を用いて、「動詞＋tebre-」におけるtebre- には「～しはじめる(開始)」という意味だけがあることを示す。

あらためて、データを検証する。

(10) Şamay kitap oqup tebredi. (=(6))
「シャマイは本を読みはじめた。」(= 実際本を読んでいる) まだ本を読んでいないという意味にはならない。
(11) Otobüs Eskişahar'ğa cetip tebredi. (=(7))
「バスはエスキシェヒルに着くところだ。」バスはまだ着いていない。バスの位置はエスキシェヒルではない。
まず、これらの例における前項動詞のLCSを考える。

oqu-「読む」
[1ACT ON-2]

oqu- は働きかけ他動詞であるという分析である。何かを読むわけであるが、読む対象は変化しない。現実問題として、読む対象、たとえば新聞が、読むことによってその新聞がしおれたり、あるいは本が、読むことによってその本に手あかがついてよごれたりということはあるが、oqu- という動詞にそれら (しおれる、てあかがつく) の意味が含まれるわけではない。

cet-「到着する」
[BECOME [2BE AT-3]]

cet- がいわゆる位置変化動詞であるという分析である。
以上のような分析を示したが、語というものは動詞に限らず多義性を持つことが多いので、本研究で示すことができなかった別の用例における oqu- と cet- については、異なる分析の可能性があることを否定しない。

これらをもとに、tebre- は「～しはじめる」「もうすぐ～する」という二つの意味を持つように見えるが、複数の意味ではなく「開始」というひとつの意味を持つことを示す。
まず、エスキシェヒル・カラチャイ語の複雑述語においては、後項の動詞が持つ意味は前項の動詞全体ではなく、前項の動詞がもつLCSの一部に何らかの意味を付け加えると仮定する。tebre- であれば前項に「開始」という意味を付け加えることになる。なお、前項の動詞のLCSと後項の動詞の意味がどのようなメカニズムで結びつくかということについては重要な問題であるが今後の課題としたい。
以上のようなことにもとづくと、oqup tebredi は次のように分析できる。

LCS [1ACT ON-2]
↑
開始

この分析が意味するところは、基本述語ACT が開始したということであるが、この場合のACTは「読む」という行為を表す。

一方、cetip tebredi は次のように分析できる。

LCS [BECOME [2BE AT-3]]
↑
開始

この分析が意味するところは、BECOME すなわち変化が開始したという意味である。開始したのはBECOME であって BE ではない。BECOME は、この場合具体的にはエスキシェヒルにいるという状態になるための変化であり、その変化が始まったため「まもなく到着する」という解釈が成り立つ。

このように、LCSにもとづいて動詞の意味を分解することによってtebre-が一見多義性を持っているように見えるが「開始」というひとつの意味を持つと分析できると主張する。

4. 結論

エスキシェヒル・カラチャイ語における複雑述語「動詞 + tebre-」を分析した。

「動詞 + tebre-」には、「～しはじめる」と「もうすぐ～する」という意味がある。このことは事実であり否定できない。したがってこのことから、tebre- には前項動詞に「～しはじめる」「もうすぐ～する」という二つの意味を付け加えるということが言えそうであるが、それは実はあくまでも表面的なレベルでの議論であり、LCSにもとづく分析では、tebre- には「～しはじめる」「もうすぐ～する」という多義性はなく、単に「開始」という意味を前項動詞のLCSにおける基本述語に付け加え、それによって多義性に見えるものが説明できる、というのが本研究によって得られた結論である。

残る課題として、前項のLCSに複数の基本述語がある場合tebre-はどのようなメカニズムでそれを選択するのか、ということがある。

引用文献

[1] Jackendoff, R.
1990　*Semantic structures*. MIT Press.
[2] 影山太郎
1999　『形態論と意味』くろしお出版.

参考文献

Jackendoff, R.
1990　*Semantic structures*. MIT Press.
影山 太郎
1999　『形態論と意味』くろしお出版.
影山 太郎(編)
2001　『動詞の意味と構文』大修館書店.
影山 太郎(編)
2009　『形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店.
影山 太郎(編)
2011　『名詞の意味と構文』大修館書店.